神戸大学基金広報誌「神戸大学とわたし Across the Boundaries」 2010年10月1日発行 通巻第3号

神戸大学とわたし

Across the Boundaries

神戸大学のメタモルフォーゼを伝えるメディア

No.3

コアとなる内科の再構築から、地域の医療ニーズに応える診療機能の拡充へ！

【社会に貢献する神戸大学】
丹波の地域医療を支える柏原（かいばら）病院の再生 ＝大西祥男・兵庫県立柏原病院院長に聞く

兵庫県寄附講座「プライマリ・ケア医学分野」が達成したもの ＝橋本正良特命教授・見坂恒明特命助教・石田岳史元特命准教授に聞く

【ボランティア活動レポート】留学生支援ボランティア「トラス」

兵庫県立柏原病院院長
大西祥男（おおにし・よしお）

1956年、兵庫県生まれ。医学博士。1983年、神戸大学医学部卒業。1990年、神戸大学大学院医学研究科博士課程修了。三菱神戸病院を皮切りに循環器内科専門医として勤務。1993年1月～1994年9月、米国ワシントン大学循環器科留学。2001年4月～2009年3月、神鋼加古川病院で、内科・循環器科部長、診療部長、副院長を勤めたあと、2009年4月より、兵庫県立柏原病院院長、今日に至る。日本内科学会内科認定医、指導医、総合内科専門医。日本循環器学会 循環器専門医。神戸大学大学院医学研究科客員教授を兼務。

コアとなる内科の再構築から、地域の医療ニーズに応える診療機能の拡充へ！

2000年代初頭に始まった「医療制度改革」は、制度疲労を深めていた地域医療に存廃の危機をもたらす引き金となった。兵庫県の丹波地域でも、地域医療の中核を担っていた兵庫県立柏原（かいばら）病院が医師不足をきたして機能不全に陥り、地域医療の崩壊の危機に直面した。2009年になって動き出した柏原病院の再生への取り組みは、これからの地域医療再生のモデルケースとして各方面からの注目を集めている。

◉医師不足がもたらした地域医療の崩壊

JR尼崎駅から福知山線を北に向かい、工場や住宅が立ち並ぶ都市部を抜けると宝塚駅に到着する。そこから車窓の景色は一変する。列車は渓谷を渡りトンネルを抜け、やがて山あいに水田が広がる農村の風景に包まれる。兵庫県立柏原病院が位置する丹波市柏原町は、尼崎駅から特急でわずか一時間余り。典型的な中山間地域の町だ。

この地で、半世紀以上にわたって地域医療の中核を担ってきた県立柏原病院は、2004年に始まった新しい臨床研修制度が引き金となって、わずか3年の間に常勤医師が激減し、地域中核病院としての機能を失ってしまった。2004年には303床の一般病床を持ち、産婦人科や小児科を含む12の診療科に43名の常勤医師を有していた病院も、4年後の2008年には常勤医が半分以下の20名にまで減少し、欠員補充もままならないまま、救急や外来の制限、病床の削減、一部診療科の廃止など、機能の大幅な縮小を余儀なくされた。

地域中核病院の機能マヒは、地域医療の崩壊をもたらす。心筋梗塞や脳卒中の重症救急患者は遠方の病院へと搬送され、開業医も重篤な患者を遠方の病院に紹介するしかない。

丹波市（旧氷上郡6町）と篠山市（旧多紀郡4町）の2市で構成される丹波医療圏の2次・3次医療を受け持つ中核病院の機能マヒは、丹波の地域医療システムを文字どおり「崩壊」させたのである。

◉病院再生への取り組み

こうした状況の中、兵庫県は、2008年「県立柏原病院再生対策本部」を設置し病院再生に乗り出した。医師確保の第一歩として、「循環型人材育成プログラム」を、兵庫県・丹波市・神戸大学の三者協定として立ち上げた。これは、神戸大学が20名の医師を確保して、4年間のプログラム期間のうち、1年間を柏原病院、3年間を神戸大学附属病院で勤務させるというもので、毎年5名の医師を柏原病院に派遣することができる内容だ。

同時に、柏原病院再生を現地で指揮する新院長が必要だった。県と神戸大学によって白羽の矢を立てられたのが、循環器内科の専門医としてキャリアを重ね、当時神鋼加古川病院の副院長を務めていた大西さんである。県と大学と地域の期待を一身に集め、2009年4月新院長として赴任した。

◉チーム主治医制で内科診療体制を再建

毎週、単身赴任先の柏原町のマンションと神戸市内の自宅を往復することになった大西院長は、「若い人と違って、大学から行けと言われると断れない世代なんですよ」と苦笑しながらも、火中の栗を拾う役目を負ったことに屈託はない。

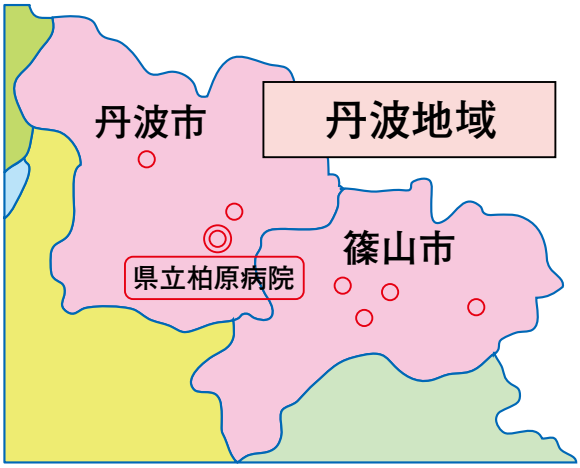
大西院長が赴任して最初に手掛けたのは、病院内各部門のスタッフへのヒアリングだ。赴任時には病床数は146床まで縮小されていたが、それでも入院患者数は病床数の3分の1にも満たない状態で、外来は紹介のみ、救急の受け入れはなし、ロビーは閑散として人気がなく、スタッフはみな全く元気がなかった。ヒアリングを通じて問題点を洗い出し、兵庫県も本気で病院再生に乗り出していることを周知させる必要があった。

また、対外的な信用回復も緊急の課題であった。現状の設備とスタッフで出来ることと出来ないことを整理し、県や市、医療圏内外の病院や地元医師会、そして救急搬送を担う消防に、実現可能な受け入れ体制を説明して回った。

懸案の内科の診療体制も、すぐに組み直した。前年にスタートした「循環型人材育成プログラム」によって整形外科など3名の医師が補充されていたが、内科はゼロ。2009年4月ようやく2名の内科医が補充され、崩壊寸前だった内科診療も息を吹き返すことができた。内科診療のない総合病院は考えられ

	面積	人口	高齢化率	病院数（一般）
丹波市	493km²	69,199 人	27.5%	3 病院
篠山市	378km²	44,326 人	27.7%	4 病院
計	871km²	113,525 人	27.5%	7 病院

人口、高齢化率：平成20年2月1日現在



●丹波保健医療圏域

●春の県立柏原病院

ない。実は2004年に14名いた内科医が一時期3名にまで減少しており、内科の閉鎖から病院そのものの閉鎖へと火がついてもおかしくない状態であった。内科医2名の増員により常勤医師6名の体制ができたので、チーム主治医制を採用して個々の医師の負担軽減を図り、入院治療と外来検査を充実させるとともに、日勤帯と輪番日での救急患者の受け入れ体制を整えた。

柏原病院ではCTやMRIなどの検査機器や放射線治療の機器は最新鋭の設備が導入されていたが、手書きのカルテや検査オーダーなど運営面のシステムは旧態依然のままであった。これも一気に院内ネットワークによる電子カルテの管理システムに入れ替え、DPC（包括的診療報酬制度）の導入、外来検査のシステム化や、クリニカルパスの整備など、より効率的な病院経営に向けたシステム整理に着手した。

◉若い医師を引き付ける「学べる病院」へ

病院が持続可能な医療を地域に提供するためには、研修医を含めた若い医師の参画が欠かせない。この時期全国で発生した地域医療崩壊の危機は、新臨床研修制度の開始によって研修医が自ら研修先を選べるようになったことに端を発していた。研修医が大学病院や地方の公立病院を避けて、市中の総合病院を研修先に選ぶようになり、医師の確保を大学の医局人事に依存していた公立病院は、退職者の補充もままならず一気に医師不足に陥ったのだ。

同じ過ちを繰り返さないためには、若手医師を育成する教育機関としての機能も充実させなければならない。2009年度からは、兵庫県と神戸大学との間で新たに「地域医療連携推進事業」の基本協定が調印され、柏原病院の診療と教育の機能を強化するために、研修医や若手医師の指導ができる3名の特命教授（内科2名、外科1名）が、週1回、柏原病院に派遣されている。そして、昨年来のさまざまな取り組みによって、2010年4月からは、3名の初期臨床研修医が3年ぶりに柏原病院で研修を始めている。

◉総合内科を軸に医療の質の向上へ

兵庫県、丹波市、神戸大学、三者の連携による資金面と人員面での支援によって病院閉鎖の危機はなんとか去ったものの、地域医療の現状は何ら変わっていない。

「医師不足」の時代に、いかにして地域に提供できる医療の質を高めていくのか。大西院長は、「その鍵は総合診療にある」とみている。総合診療医あるいは総合内科医、名称も定義もまだ確立していない分野だが、求められているのは、幅広い臨床経験と知識を持ち、特定の「病気」を診るのではなく、病気を抱える「人」を診る医者、地域の社会教育の分野にも熱心に取り組む医者である。

「柏原病院は元々、消化器・循環器分野に強い病院と評価されていました。そこに専門分野にこだわらず総合的に診療するマインドを持った内科の医師が5名も加わってくれたら、すごい戦力になりますよ」

そう語る大西院長は、総合内科医を病院診療の司令塔と位置付ける。大西院長自身も、循環器の専門医として経験を重ねた上で、柏原病院への赴任後は総合的な診療に日々当たっている。

高齢化社会が進むと、糖尿病や高血圧など複数の診療科にまたがる慢性疾患を持ち、さらに別の病気を発症する患者も少なくない。患者に診療科をあちこち渡り歩かせるのではなく、一人の患者を総合内科医が責任を持って診ることができれば、病院としても少ない医師数で多くの患者を診ることができる。臓器別の専門医も、急性期の患者や重篤な患者の治療に専念することができるのである。

◉地域住民とともに地域医療の再生を

柏原病院は、かつて小児科が存亡の危機に直面したことがある。そのとき地域のお母さんたちが立ち上がり、「コンビニ受診をやめて小児科を守ろう」という運動を始めた。この「小児科を守る会」の活動はマスコミで紹介され、一躍、全国の注目を集めた。柏原病院の再生には地域住民という強い味方がいるのだ。

大西院長は、月一回開催される地元自治会の総会に毎回出席し、病院再生の報告を兼ねて、健康指導のレクチャーを欠かさない。

県立柏原病院は、今、地域住民とともに新しい地域中核病院のあり方を模索している。

寄附講座を拠点に但馬の公立9病院がネットワークを構築、地域医療の再生に挑む！

2006年1月、兵庫県の寄附講座として神戸大学に「へき地医療学講座」が開設された。3月には、公立豊岡病院に「へき地医療研究所」が設置され、ここを拠点に但馬の地域医療再生を目指す活動が開始された。それから5年。講座は多くの成果を達成するとともに、「プライマリ・ケア医学分野」と名を変え、第2フェーズに突入した。この間、現場での活動を担ってきた石田岳史元特命准教授と見坂恒明特命助教、そして4月から石田さんに代わって講座を担当している橋本正良特命教授に、これまでの成果とこれからの課題を聞いた。

◉「学べる環境」が医師を呼ぶ

兵庫県が寄附講座を設置した最大の目的は、2004年の新臨床研修制度の導入を契機に深刻な医師不足に陥った但馬地域で、住民への医療サービスの質を低下させないためにはどのような医療システムを構築すればいいのか、その方向性を明確にすることだった。

その実現のために講座が掲げた大きな目標が2つある。ひとつは、「医師が少ない中でもレベルを下げることなく医療を提供できるシステムを研究・実践すること」。そしてもうひとつが、「研修医や若い医師が自ら望んで働きたくなるような『学べる』環境を整備して、医師を但馬に呼び込むこと」だった。

石田さんと見坂さんが豊岡に赴任し、まず手掛けたのは、但馬地域の医療を担う公立9病院のネットワークの構築だった。但馬の公立病院に勤務した経験を持つ二人は、問題意識を共有する医師たちに働きかけて、「但馬総合診療研究会」を立ち上げた。研究会には、これまで地域医療を担ってきた関係者が自発的に集まり、互いに知恵を出し合い、外部の専門家を呼んで議論を重ね、但馬の医療のあるべき姿を考えた。そこで見えてきたのが「学べる環境が医師をよぶ」というコンセプトだった。

幸い、但馬では公立豊岡病院（500床）と公立八鹿病院（420床）という二つの大規模病院を核に、9つの公立病院がそれぞれ役割を分担しながら地域全体をカバーしている。都市部の病院に引けを取らない高次の医療から、高齢者の在宅医療まで、「学ぶ」素材には事欠かない。必要なのは、研修プログラムと指導体制を整備して、但馬が「学べる」場であることを、都市部の医学生や教育関係者に周知させることだった。

◉「総合診療夏季セミナー」の開催

2007年8月、兵庫県養成の医学生を対象に体験型地域医療実習を開催した。この経験をもとに、翌2008年8月には、地域の医療機関の協力を得て、「第一回総合診療夏季セミナー」の開催にこぎつけた。対象は医学生に限らず、看護、介護、薬学など医療系のあらゆる分野の学生に門戸を開き、「総合診療」と「チーム医療」の2本の柱をテーマとして、医学教育の最先端であるインタープロフェッショナルラーニングを実践する場とした。

夏季セミナーの開催も今年で3回目となり、「学べる場としての但馬」を都市の学生や教育機関に強く印象づけることができた。

その結果、初期研修課目「地域医療」の受け入れ実績も着実に伸びてきた。受け入れ初年度となった2006年には、神戸大学からの希望者はわずか1名だったが、翌年からは10名、15名、23名と増え続け、2009年には定員22名の枠が一杯になった。

「学べる環境を整備すれば、医師は来る」というコンセプトの正しさが証明されたのだ。

◉「北兵庫病院群総合医プログラム」の展開

夏季セミナーの出発点となった「但馬総合診療研究会」は、より広域の協力・連携を図るため「北兵庫総合診療研究会」と名を変え、新たなプロジェクトを始動させた。但馬地域の9つの公立病院を北兵庫病院群としてネットワークを構成し、「総合医」と「家庭医」を育成する後期研修プログラムを立ち上げたのである。

具体的には、豊岡病院、八鹿病院の2病院の総合診療科での研修を軸にして、専攻医の希望と必要に応じて、但馬救急救命センターでのERや、それぞれ特色ある医療活動を展開している地域医療機関での6か月ブロック研修を組み合わせ、各学会の専門医のライセンスを取得するまで指導する。専攻医自身のライフプランに合わせて、「総合内科医（日本内科学会総合内科専門医）」、「総合医のマインドを持った臓器別専門医（日本内科学会認定内科医＋臓器別専門医）」、「総合医のマインドとセンスをもった家庭医（日本内科学会認定医＋日本プライマリ・ケア専門医）」を養成するプログラムだ。研修期間中はそれぞれの専攻医に専属の指導医がつき、出産・子育て中の女性医師への支援と配慮も怠らない。

現在、豊岡病院の総合診療科で研修医の指導にあたっている見坂さんは、「豊岡にもたくさんの研修医が来てくれるようになり、総合診療への関心も高くなった」と若い医師を観察している。「彼らは田舎やへき地を厭わず、そこで何が学べるかを重視している」と、見坂さんが感じ取る若い医師の考え方に、これからの地域医療の可能性が見えそうである。

◉但馬は日本の近未来図

日本は、2007年に、高齢化率（65歳以上の人口比）が21％を超えて人類がこれまで体験したことがない「超高齢社会」に突入した。

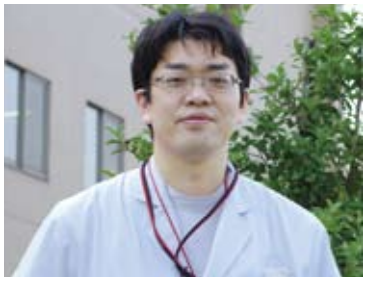
兵庫県に目を移すと、2008年の県平均高齢化率は21・2％、神戸市が21・4％と、ほぼ全国平均レベルなのに対して、但馬地域は29・2％とずば抜けて高い。「10人の村」に例えて言えば、「15歳～64歳が6人、65歳以上が3人いて、中学生以下の子供が1人だけ」という典型的な少子高齢化社会だ。

そして、10年後の2020年には日本全体の高齢化率が29％台に突入すると予測されている。中でも団塊の世代が多く居住する都市

●プライマリ・ケア医学分野特命教授

橋本正良（はしもと・まさよし）

1961年、群馬県生まれ。医学博士（東京大学）。1987年、防衛医科大学校卒業。1990年、米ピッツバーグ大学レジデント研修。米国家庭医療学会特別会員。東京大学医学部老年病学教室客員研究員を経て、2000年、神戸大学医学部総合診療部助教授。2009年、神戸大学大学院医学研究科兵庫県寄附講座特命教授。2010年、同「地域社会医学・健康科学講座」プライマリ・ケア医学分野特命教授。日本内科学会認定内科専門医・指導医、日本プライアリ・ケア学会認定医・指導医、日本老年医学会専門医・指導医・代議員。



●プライマリ・ケア医学分野特命助教

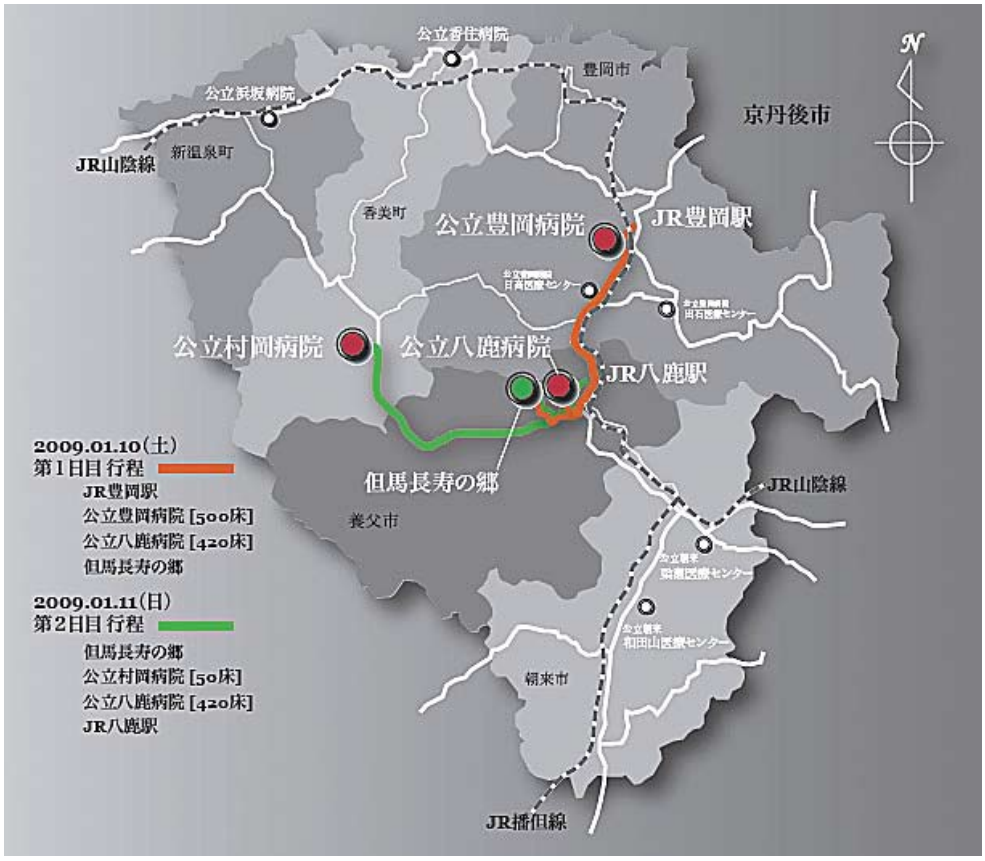
見坂恒明（けんざか・つねあき）

1975年、兵庫県生まれ。2000年、自治医科大学医学部卒業。兵庫県立淡路病院での研修を経て、2003年から公立和田山病院、2005年から公立村岡病院内科医員。2006年、神戸大学大学院医学研究科へき地医療学（現プライマリ・ケア医学）特命助教。2007年4月より 公立豊岡病院総合診療科診療責任者を兼務。日本内科学会認定内科医、日本プライアリ・ケア学会認定医・指導医、日本循環器学会専門医、日本化学療法学会抗菌化学療法認定医、日本医師会認定産業医。

●自治医科大学教授
（元へき地医療学分野特命准教授）

石田岳史（いしだ・たけし）

1968年、兵庫県生まれ。1993年、自治医科大学医学部卒業。兵庫県立淡路病院での研修を経て、公立浜坂病院内科医員。自治医科大学附属大宮医療センターシニアレジデント、公立浜坂病院内科医長、公立村岡病院内科医長、自治医科大学総合医学第一講座兼循環器科助手を歴任。2006年、神戸大学大学院医学研究科へき地医療学特命助教授（翌年特命准教授）。2010年、自治医科大学総合医学第一講座学内教授、兼さいたま市民医療センター内科診療部長、兼神戸大学非常勤講師。日本内科学会総合内科専門医・指導医、日本循環器学会専門医、心臓リハビリテーション認定指導士、日本医師会認定産業医。



●但馬保健医療圏域と「医師が学べる北兵庫をめざす北兵庫病院群ツアー」（2009.1）

周縁部で、医療サービスへの需要が急激に増加し、地域の医療システムが機能不全となって崩壊する。そういう最悪の事態までが予想されている。

その意味で、「但馬での地域医療再生・総合医養成プロジェクトは、迫り来る医療危機の大波に対処するための理論構築の実践でもあった」と石田さんはその意義を改めて振り返る。

◉「プライマリ・ケア医学分野」がめざすもの

但馬をフィールドとした「へき地医療学」の寄附講座は5年間延長され、第2フェーズに入った。講座名も「プライマリ・ケア医学」に変わったことで、より広範な地域社会が求める研究課題に取り組む下地ができた。

プライマリ・ケアとは「患者が最初に接する医療」を意味し、国際的な医療の概念として「身近に容易に得られ、適切に診断処置され、また以後の療養の方向について正確な指導が与えられることを重視する概念」（プライマリ・ケア連合学会）とされている。

医学部附属病院で総合内科の診療も受け持つ橋本さんは、「総合診療を軸にした診療科の整備は、但馬のような地方だけでなく、都市部の病院でも早急に実現すべき課題だ」と言う。そして「日本はこの分野ではかなり遅れている」と強調する。

「細分化された診療科のシステムでは、患者は自分が何の病気なのか、自分自身で見当をつけて診療科を選ばなければならない。場合によっては、診療科をいくつも渡り歩くことになりかねない」

これは変だとわかっていても、これまで制度として放置されてきたのだが、深刻な医師不足に陥って初めて改善の機運が高まってきたのである。

但馬での取り組みの成果を受けて、兵庫県は、養成医の大幅増員を計画している。兵庫県が橋本研究室に期待する役割は、彼ら養成医が将来、各地の公立病院で地域医療を支え、かつ、次の世代を教育する指導医として育つよう、在学中からサポート体制を作り出すことだ。

プライマリ・ケア医学を兵庫県下の公立病院に根付かせ、「人を診る」プライマリ・ケア専門医を育て、学び続けられる場を作ること。それが寄附講座「プライマリ・ケア医学分野」の役割としてクローズアップされてきたのである。

留学生支援ボランティア「トラス」

言葉も生活習慣も違う世界にやってくる留学生を支援しようと、神戸大学では16年前に学生ボランティア「トラス(Truss)」が設立された。トラスとは、三角形で構成される堅固な構造体。トラスを媒介として、異文化の間に橋を架けようという願いから名付けられた。

堀田和希
法学部2回生

堺　遥
トラス代表・国際文化学部3回生

◉「受け入れ」

「トラスには3大支援活動がある」と、2009年10月からトラスの代表を務めている堺遥さんは言う。「第一に、受け入れ。第二に、キッチン計画。そして第三に、ウェルカム・パーティー」である。

「受け入れ」とは、4月と10月の年2回、留学生の入学に際して必要となる行政手続や生活の支援を行うこと。例えば、外国人登録申請書の記入の手伝い。たかが書類の作成と思うなかれ。

「住所など日本語で表記する部分を自分で書くのは簡単ではない」と、堀田さんが説明する。大学の寮の住所などあらかじめわかっている項目については、それらを事前に記入しておくのである。また、名前の表記も大いに気を使うところだ。国によって異なる表現の名前を、申請書の書式に合わせるお手伝いをするのである。

さらに、国民健康保険の加入、銀行口座の開設、定期券や携帯電話の購入、アルバイトの申請、抗体検査書類の記入など、日本語に関するサポートは無数にある。

◉「キッチン計画」

留学生が神戸で生活を始めたとき、まず直面するのが生活必需品をそろえること。衣食住にまつわる生活用品を一からそろえるのはなかなか大変だ。

その一部でも格安で提供したいということで始まったのが「キッチン計画」という名のバザーである。

「食器や、ドライヤー、アイロンなど、手に持って帰れるものなら何でも集める」と、堺さん。「キッチン計画」という名称は、まずは台所から生活を支援しようということで、設立間もないころの先輩が名付けた。年2回の入学の時期に合わせて、4月と10月に開催されている。

●ベビーシッター活動の様子

◉「ウェルカム・パーティー」

「ウェルカム・パーティー」は、トラスのメンバー全員で取り組む留学生歓迎のパーティーだ。留学生の入学の時期に合わせて4月と10月の2回開催されている。いつも総勢200名近い参加があり、活況を呈している。

特に4月のウェルカム・パーティーは、新入生にトラスへの参加を呼びかける新歓イベントの意味も持っている。

新入生がトラスに興味を持つ動機は、多くの場合「留学生と友達になりたい」というところから始まると、堺さんは言う。しかし、そのうちに、異文化交流の奥深さに気付くことになる。「言語や文化を異にする外国人と交流することは、楽しい反面、大きなエネルギーを要すること」だからである。

留学生支援の意義は、まさにこの点にある。「ここから多くのことを学んでいける」と、堺さんは自分の経験を振り返る。

◉「留学生支援」のさらに奥へ

以上の3大支援活動だけでも、都合年間6回。十分に忙しいサークルだ。しかし、トラスの活動はこれだけではない。

「同じ釜の飯を食う」という意味のイベント「おなかま」。これは、留学生の出身地の料理と日本の料理をいっしょに作って交流するものである。

母語や得意な言語を教えあう「Language Exchange」。お花見や紅葉狩りなど、季節に応じたイベント。留学生センターの一般公開日やホームカミングデイに無料で手作りの茶菓を振舞う「Café de Truss」など、総勢70名のメンバーがそれぞれグループを組んで取り組んでいる。

堀田さんは、毎週水曜日にベビーシッターを行っている。留学生・研究者の家族向けに「家族のための日本語講座」(『KOKORO-NET in KOBE』主催)が開かれている間、その子供たちの面倒を見るのである。

「もともと子供は好きだし、とても楽しんでやっている」と、堀田さんは言う。トラスには「言語に頼らなくても外国人と交流できるはず」という信念から参加した。最初は難しかったが「彼らの悩みをとことん聞いているうちに、彼らが何を考えているのかが分かるようになった」と振り返る。その経験は、言葉をもたない子供たちとの交流に生かされている。

代表の堺さんは、まもなく交換留学生としてフランスに旅立つ。「トラスでの経験のおかげで、異文化の世界に一歩踏み出すことにためらいがなくなった」と、留学への期待を膨らませている。「留学生支援」の奥は果てしなく深い。

ききん・だより

「神戸大学基金」、基盤事業の展開開始！

・在学生の国際化対応・神戸大学東京オフィスの整備・神戸大学基金奨学金創設・人工芝グラウンド敷設募金開始

「神戸大学基金」のただ今の募金状況はグラフのとおりです。ご協力いただいた皆様には厚くお礼申し上げます。

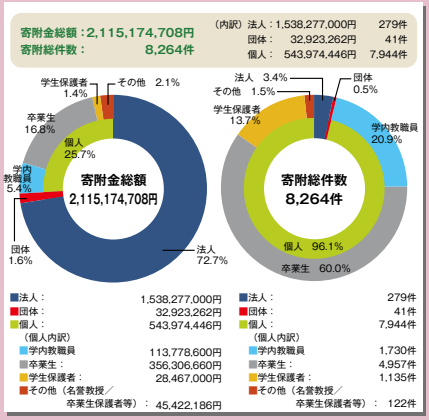
さて、今年度後期から、以下のように基盤事業の一部を展開開始します。

①在学生の語学力向上等のために、英語論文校正・学会発表指導プログラム（KALCS: アカデミックランゲージ&コミュニケーションサポート）を開始します。

②来年度4月から、首都圏における卒業生ネットワークのさらなる強化を図るために、現在の場所（帝劇ビル地下2階、神戸大学東京六甲クラブ内）から1階上の地下1階へ拠点事務所を移し、首都圏での活動環境を充実させます。

③経済的支援を必要とする成績・人物ともに優秀な新1年次生に対し、また、本人若しくは学資負担者が勤務する会社の倒産・解雇等により、やむを得ず失職・退職した場合や災害等の不慮の出来事に対し、それぞれの修学・生活支援対策奨学金を給付します。

■図で見る神戸大学基金募金状況
（2010年（H22）6.30現在）



④在学生のチームワーク向上に向けた、全学共通グラウンド人工芝化の募金活動を推進します。一定額以上のご寄附をいただいた方のお名前を冠します。

「神戸大学基金」はこの他にも、明確な目標を持った優秀な学生の海外留学・研修への派遣支援プログラムを現在策定中です。

次代を担う後輩のために、本学卒業生をはじめ、保護者の皆様、応援していただける個人・法人の皆様からの浄財を是非とも「神戸大学基金」にお寄せ下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

■ご寄附いただく方法

【個人のみなさま】

平成22年分から、所得税法上の特別優遇措置として、適用下限額が現行の5千円から2千円に引き下げられ、より一層ご寄附をしていただきやすい環境になりました。

お名前・住所・電話番号を下記の基金推進室までお知らせください。折り返し、払込取扱票一式をお送りしますので、銀行または郵便局からお振込みください。詳しくは左記のサイトをご参照ください。

http://www.kobe-u.ac.jp/kobekikin/general.htm

【法人のみなさま】

所定の寄附申込書に必要事項をご記入の上、左記基金推進室まで郵送ください。折り返し、振込依頼書をお送りします。寄附申込書は、基金推進室に法人名・住所・電話番号をお知らせいただけば送付します。あるいは左記のサイトから書式をダウンロードすることもできます。

http://www.kobe-u.ac.jp/kobekikin/corporation.htm

神戸大学基金推進室
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
TEL 078-803-5414
FAX 078-803-5024
E-Mail: kikin@office.kobe-u.ac.jp

お知らせ

寄附者のみなさん！
一言メッセージをお寄せください

神戸大学基金にご寄附いただいたみなさんにお願いします。あなたの寄附行為の動機や、神戸大学への期待など、神戸大学基金をサポートする一言メッセージ（最大31文字程度）を左記メールアドレスまでお寄せください。紙面の許す限り掲載していきます。

E-Mail: kikin@office.kobe-u.ac.jp

『神戸大学とわたし』一言メッセージ集

■これまでにいただいたメッセージ：

●神戸大学に学べたことへの感謝の気持を「基金」へ、後輩へ。それが恩返し。（S23卒）

●喜怒哀楽、どんな心境の時も優しく迎えてくれる、神戸大学は私の心の故郷。（S32卒）

●学歴欄に神戸大学卒と書かせて戴くお礼です。今後も寄附を時々続けます。（S39卒）

●ハイデッガーの『メスキルヒ700年』を授業で読んでいた時に、先生が教会の鐘の話しをされた丁度その時、大学の下の方の教会の鐘が鳴ったので、学生が皆、どっと笑ったのを覚えています。「基金」は思い出深い母校のために。（S62卒）

●人の役に立ち、社会で活躍する人材に育ててほしい。（学生保護者）

●神戸大学が好き。でももっと…耳を傾けて！-という思いをこめて。（学内教職員）

●基金奨学金の創設をきっかけに神大生が世界へ羽ばたきますように！（学内教職員）

発刊のことば

神戸大学は、明治35年（1902年）の創立以来、開放的で国際性に富む固有の文化の下、「真摯・自由・協同」の精神を理念とし、社会に貢献する人間性豊かな指導的人材の育成と、普遍的価値を有する「知」の創造拠点＝世界的教育・研究機関＝たることを目指してきました。

●

今、20世紀都市文明からの転換が激しく迫られる中で、大学にはその創造力を発揮して新しい21世紀文明構築のさきがけとなることが求められています。「神戸大学ビジョン2015」は、その第一歩として、「世界トップクラスの教育・研究」、「卓越した社会貢献・大学経営」の実現を目指しています。

●

「神戸大学基金」は、ビジョンの実現を加速するためのターボ装置です。ターボの力をより強力なものとするためには、神戸大学が社会により深く根を張り、そこからの支持と支援を拡大することが不可欠となっています。

●

本誌『神戸大学とわたし――Across the Boundaries』は、神戸大学と社会の接点に取材し、ビジョンを先取りする取り組みを可視化することで、社会貢献の促進とビジョンの早期実現に資することを目的として発刊されました。読者の皆様の忌憚のないご意見をお待ちしています。

●

2010年1月1日

※表紙題字下の「メタモルフォーゼ」は、生物学でいう「変態・変身」の意。本誌は神戸大学が21世紀に飛躍する様を追いかけます。

神戸大学とわたし
Across the Boundaries
通巻第3号 No.3
2010年10月1日発行

発行人　国立大学法人神戸大学
編集人　企画部社会連携課
〒657-8501神戸市灘区六甲台町1-1
TEL: 078-803-5414
FAX: 078-803-5024
E-Mail: kikin@office.kobe-u.ac.jp

予告

思い出の詰まった母校へ！

第5回 神戸大学ホームカミングデイ

2010年10月30日(土)
記念式典：出光佐三記念六甲台講堂

【予定しているイベント】

記念式典、第７回留学生ホームカミングデイ、学部企画、中山正實画伯絵画展示、ホームカミング市、学生イベントなど

卒業生のみなさま・名誉教授の先生方に、現役学生・教職員との交流を深めていただく機会として、
今年も「ホームカミングデイ」を開催します。
ゼミ・クラブ・サークル同窓会の同時開催もお待ちしています。みなさまお誘い合わせの上、お越しください。

●出光佐三記念六甲台講堂

KOBE UNIVERSITY

Toward Global Excellence
in Research and Education